

真の宗教と批判精神

2010年10月17日 於：神奈川集会

唯一会は昌美先生批判の会ではありません

ここは《昌美先生批判の会》ではありません！ 《「世界平和の祈りは最高の祈りである」と主張する集まり》です。もっとも、五井先生の教えを肯定するためには昌美先生の教えを否定せざるをえないので、結果的には昌美先生を批判することもあります。《昌美先生を批判することを第一の目的》とした会合ではありません。唯一会とは、五井先生の教えを学び合い、「世界平和の祈り」を唯一の行とする人たちの集まりなのです。繰り返しますが、昌美先生を批判するために私はこの会を運営しているわけではありません。私は感情的に昌美先生を否定しようとしている人間ではありません。昌美先生を否定するどころか、昌美先生を生かし助ける目的で、私は五井先生の教えを解説しているのです。昌美先生はいつか私の真意を理解して感謝して下さる日がくることでしょう。

私たちは白光真宏会を愛するゆえに批判しているのであり、根も葉もない事実をでっちあげて白光真宏会を陥れようという気持ちは毛頭ありません。また、五井先生の説く光明思想とは、事実は無批判になって、きれいごとばかりを言うことではありません。事実を直視して反省し、「消えてゆく姿」として「世界平和の祈り」の中に入れることです。

私は常に真実を求めているのです。私にとって重要なことは、真実は何か、なのです。もし私が誤っていたならば、即座に反省して自分の考えを改めたいと思っております。

昌美先生を批判しているだけでは駄目

白光真宏会をやめた人の中には、昌美先生に対して批判ばかりしている人がいます。

ある日の夜も白光真宏会をやめた人とお電話でお話していたのですが、その方は昌美先生の教え方に対して批判ばかりしているのです。「昌美先生の教えと五井先生の教えは違う」と批判するのは結構なのですが、それだけで終わっているのです。「それほど五井先生の教えを信じているのなら、世界平和の祈りを一緒に祈りましょう」と私が言うと、「私は、今は世界平和の祈りを祈っておりません。別の宗教団体に顔を出しています」という答えが返ってきました。

五井先生を尊敬し、五井先生のみ教えを信じているならば、白光真宏会をやめても「世界平和の祈り」を祈り続ければよいのに、なぜか「世界平和の祈り」までやめてしまっているのです。それでは真実に五井先生のみ教えを知ったことにはなりません。「昌美先生の教えは間違い」と知っているならば、自らが五井先生のみ教えを人々に広めたらよいではありませんか。昌美先生が「世界平和の祈り」を古い方法として葬り去るならば、自ら

が「世界平和の祈り」を人々に広めたらよいではありませんか。

昌美先生を批判ばかりして自らは何も積極的な行動をしないのでは、それでは口先だけの評論家と同じであって、宗教者とは言えません。自分自身の欲求が満たされない不満を昌美先生への批判に代えているだけでは、それは批判ではなく、悪口となります。正しい批判は建設的ですが、不満から出た悪口は建設的ではありません。批判と悪口はまったく異なるのです。

誤解されてはいけないので改めて申し上げますが、唯一会は「世界平和の祈り」一行法を行じる会でありまして、昌美先生への悪口をお互いに言い合って自分の憂さ晴らしをするような、そんなつまらない会ではありません。昌美先生が「世界平和の祈り」を祈らないのであれば、私たちが「世界平和の祈り」を祈りましょう。昌美先生が「世界平和の祈り」を教えないのであれば、私たちが「世界平和の祈り」を人々に教えてゆきましょう。昌美先生を批判ばかりして、自分は「世界平和の祈り」を祈らず、人々に「世界平和の祈り」を知らせることもないというのでは、自分の欲求不満を昌美先生にぶつけているだけになります。それでは何のための批判か分からなくなります。

宗教とは、「何でもかんでも善である」「味噌も糞も同じである」というように、批判力を失わしめるものではありません。宗教心が深く開発されればされるほど善悪の判断や美醜の判断がつくようになり、物事への批判力が増してくるものです。宗教をやればやるほど批判力をなくし、馬鹿みたいになるのは、それは真実の宗教ではありません。鋭敏な批判力を持ちながらも、その誤りに把われずに、誤りは消えてゆく姿として祈りに転換してゆき、自らの心の内には不平不満もなく、相手に対する憤りもない、というふうにならねばなりません。

また、批判するのは結構なのですが、批判した後には必ず祈りを付け加えなくてはなりません。祈りのない批判は悪口と同じです。愛の祈りのある批判こそ人を生かすことになります。私たちは、人を批判ばかりして祈りを忘れてはなりません。誰かの悪口を言ってしまったら、その後に「あの人の天命が完うされますように」と祈る習慣をつけましょう。嫌いな人の天命の完うを祈る気がしない場合は世界人類の平和を祈りましょう。人の批判ばかりしていないで、人の幸せを祈りましょう。

「世界平和の祈り」は愛の祈りであるのです。その「世界平和の祈り」を祈っている私たちは愛の祈りの集団なのです。私たちは世界人類を愛しているのです。私たちはすべての人の幸せを祈っているのです。私たちの心にあるのは世界人類への愛だけなのです。私たちはひたすら愛し続けているのです。

私たちはすべての人を愛しています

何度も書いているように、ここは昌美先生を批判する会ではなくて、五井先生の教えを信仰し、五井先生の提唱された「世界平和の祈り」を唯一の行としている人たちの集まり

です。昌美先生をあえて批判する必要はありません。あなたも、ぜひ私たちと一緒に「世界平和の祈り」を祈って下さい。

愛する昌美先生の教えを立てたいのは私もやまやまなのですけれど、五井先生の教えと昌美先生の教えが正反対のために、昌美先生の教えを正しいと立てれば五井先生の教えを否定することになってしまうのです。五井先生の教えを立てれば、今度は昌美先生の教えを否定することになってしまう。五井先生と昌美先生の両方を私は立てたいと思うのですが、お二人の教えが正反対のために、どちらかを立てれば、どちらかを否定しなくてはなりません。ここが私の苦しむところなのです。

五井先生の教えと昌美先生の教えをよくよく比較してみて判ったことは、「五井先生の教えの方が正しい」という結論でした。もし「昌美先生の教えの方が正しい」という結論が出たら、私は五井先生の教えも本も、すべて捨てても構わないと思うのです。私の理解力、私の直観力で考えた末に判ったことは、「五井先生の教えは正しい」という結論だったのです。誰かに言われたから、そう思ったのではありません。誰かにそう信じるように言われたからでもありません。どう考えても、「五井先生の教えの方が正しい」と私には思えるのです。

そこで、五井先生の教えである「正しい宗教と誤れる宗教」を比較し、五井先生の教えを説きますと、否応なく昌美先生の教えを否定することになってしまうのです。私とても昌美先生を批判したくはありません。しかし、五井先生の教えを肯定すれば、昌美先生の教えを認めるわけにはゆかないのです。昌美先生の教えを否定しなくては五井先生の教えを肯定できないからです。

たとえば「祈りと念力」について五井先生は念力を否定しているのに、昌美先生は「これは念力ではない」と言いながら、実際には念力行を自身もやり、会員にも勧めております。もし昌美先生を立てようとするれば、五井先生の教えを否定しなくてはなりません。五井先生の教えを否定してしまったら、私の信仰は根底から崩れます。そんなことはできるはずがありません。そこで涙をのんで、昌美先生の教えについて批判をしなければならぬ時もあるわけです。これは五井先生の教えを生かすためであるのです。

五井先生が「真実の宗教とはこうした教えである。誤った宗教とはこうした教えである」と説かれたことを、私はそのまま伝えているだけなのです。何度説明しても、なかなか分かってもらえないので、私もくどいほど言いますが、私は五井先生が説かれたことをそのまま同じように説いているだけなのです。私が説いていることは、その前に五井先生が既に説かれた事柄なのです。私の説いている教えは五井先生の本に書かれてあることなので、五井先生の本をよくお読みになっていただければ、その事実は必ず納得していただけるはずなのです。私には、昌美先生に対する怒りも憎しみもありません。ただ愛の光だけがあるのです。

誤った宗教観も人類の業想念が創り出したものであり、それもすべては消えてゆく姿と観じて「世界平和の祈り」を祈り続けているのです。あなたも五井先生の本を再度読み直して、五井先生の教えを学び直してみることをお勧めします。ご一緒に世界平和実現のために働いてまいりましょう。

私たちはすべての人を愛しているのです。

批判から逃げず、批判を受ける勇気を持て！

以前の毎週日曜日の聖ヶ丘道場統一会では、午前10時から昼までの約二時間、五井先生のご指導による統一行と講話がありました。その後、五井先生の講話の前に各講師がみ教えについて話すようになったのですが、どうしても五井先生の講話とは内容にズレがあって、五井先生はたびたび修正されていたものです。

たとえばある日、会の大幹部として会員から尊敬され、「霊能力がある」と自称している講師も、会場にいる会員からの「怠惰は悪ですか？」という質問に答えた後に、「そんなあいまいな答え方をするな！ 怠惰は業想念に決まっているだろう」と五井先生に激しく叱られて、「そのショックから立ち直るのに20年もかかった」と述懐していました。その時の質問者は、誰だろう、この私なものでした。また、目の中に入れても痛くないほど愛していた昌美先生のお話についても、誉め言葉の合間に、「昌美も、判っているようで判っていない。まだまだだ」と、五井先生は、各講師のお話だけでなく、昌美先生のお話についても修正されていたのです。

ところが、五井先生が他界されますと、たとえ講師が五井先生の教えに外れた講話をしても、誰もその誤りに気づかず、誤りを指摘できず、修正されなくなったものですから、白光真宏会の講師のほとんどが五井先生の教えから少しずつ外れてゆき、自己流に解釈し、挙句の果ては、理事長から講師にいたるまで全員が、「世界平和の祈りは初心者用で、『我は神なり』という宣言の方がより高い方法なのだ」と愚かなことを言い出す始末です。五井先生があれば「世界平和の祈り以上の素晴らしい祈りはない」と口をすっぱくして説いたのに、耳にタコができるほど聞かされたのに、まったく情けないことです。

そこで、「このままでは駄目だ！」と、神界の五井先生と神々は判断して、改めて「世界平和の祈り」を私を通して説くようになったのです。白光の職員でもなく講師でもない方が、白光の組織に束縛されず、神のみ心のままに自由に発言できるので、私が選ばれたのです。それ以来、私は「世界平和の祈り」を五井先生のように説くようになったのですが、私が五井先生と一体化していることを最初に直観的に見抜いたのは長老の島田重光先生でした。私の教えたことを島田先生は素直に謙虚に受け取って、他の行法はすべて捨て、「世界平和の祈り」一念の行に戻られたのです。

宗教の道において、自分の耳が痛いからといって、批判を言わせず、批判する者を排除

して、「ハイ、ハイ」と自分の言うままに動く人間だけを「素直だ」と誉めて取り立てるというような宗教者は、自己の誤りを指摘してくれる人を自ら排除してしまっているのですから、それ以上進歩できないのです。自己保身だけを考えて、社長の誤りを批判できず、進言もできない重役たちのいる会社は潰れます。それと同様に、信者を無批判な人間にしてしまいますと、その宗教団体はそれ以上進化できないのです。

そこで、自己の正しい批判力を養うと共に、「人から批判を受ける勇気を持ちなさい」と私は教えているのです。批判に耳を傾け、自分が間違っていたら、自分の行為を反省して直したらいいのです。そうすれば誰よりも自分が得をするではありませんか。また、相手の批判が間違っていたら、相手の批判に対して批判してあげれば、相手も誤りに気づいて喜ぶます。

批判から逃げず、批判を受ける勇気を持って下さい。それが「祈りによる世界平和運動」という私たちのグループを活性化することにもなるのです。

正しい批判は世界を平和にする

いつも言っていることですが、批判は悪意を持った悪口とは違います。宗教信仰することは、無批判の人間になることではありません。本心が開発されてくればくるほど、本心と業想念の区別がついてきて、鋭い洞察力が出てきて、批判力も増してくるものです。ただそれと同時に、自己の心内の調和力もついてくるので、批判したからといって、あるいは批判されたからといって、人を傷つけ攻撃するような暴徒のようにはならず、終始穏やかでいられるのです。

批判と悪口の違いは、その人を愛して言っているのか、その人を愛することなく言っているのか、の違いです。人の批判をしたら、必ずその人の天命の完うを祈るというように習慣づけてまいりましょう。愛の祈りが根底にあってこそ、批判は生きてくるのです。

正しい批判は、人格を高め、社会を改善し、世界を平和にしてゆくのです。

質疑応答：誤った宗教への批判は神のみ心です

【ご質問-1】〔批判はそもそも神のみ心に反すると聞いているのですが？〕

「他の批判は神の完璧さを疑っている自我のある状態」と聞いていますが、どうなのでしょうか？

【お答え-1】〔正しい宗教信仰は批判を否定せず、却って批判力を高めます〕

五井先生の教えには、「他の批判は神の完璧さを疑っている自我のある状態」という教えはございません。白光真宏会の友人の教えなのか、どなたからお聞きになったかは知りませんが、それは五井先生の教えではありません。また中には、同じような意味合いで、

「争いは他を排除した限定や断定の心から始まる。だから、すべてを受け入れないといけないのだ」という意味のことを言う人もいますが、これも五井先生の教えではありません。

あなたが、「他の批判は神の完璧さを疑っている自我のある状態」という教えを信じることはあなたのご自由ですが、それならば私に対する批判もやめたいかがでしょうか。あなたがその教えを本当に守るつもりならば、私に対する批判もしないはずではありませんか。「批判するな」というあなたのご意見も、私に対する立派な「批判」なのです。あなたの言動は矛盾しているではありませんか。

これからは五井先生の教えについて述べますが、信仰とは無批判な人間を作ることはありません。信者を無批判にさせることは、個人の自由を認めない共産主義の権力者や独裁者と同じで、邪教の教祖が使う手なのです。その方が信者を操りやすいからです。それに対して、正しい信仰は深まれば深まるほど本心が開かれてきますから、正しい宗教と誤る宗教の区別がついてきて、批判力が強まってくるのです。この批判力は、業想念から湧いてくる悪口とは違って、相手の誤った業想念を浄め去る力があるのです。

なお、批判と悪口は、似てはいますが、本質的に全く違うものであるのです。批判とは本心の働きであり、悪口とは業想念の働きであるのです。本心から出る批判は神のみ心であり、業想念を浄めるのです。

【ご質問-2】〔世界平和の祈りが唯一最高ならば、他の祈りは劣るのでしょうか？〕

「世界平和の祈りが唯一最高の祈りだ」とおっしゃっていますが、それ以外の祈りはどうなるのでしょうか？ もし「世界中の人が平和で暮らせますように、守護天使様、神様どうぞ見守っていて下さい」と祈ったら、その祈りは世界平和の祈りに劣る祈りになるのでしょうか？

【お答え-2】〔個人的には自分の心境に合った祈りを捧げてよいのです〕

日本国民においては、何人においても自由に信仰する権利、信仰の自由の権利があります。あなたが何を信仰して、どんな祈り言で祈ろうと、それはあなたの自由なのです。私は「世界平和の祈りは唯一最高の祈りである」と主張しておりますが、そう主張することは私の自由であると共に、また、「世界平和の祈りは唯一最高の祈りではない」と主張することも自由なのですから、そう思っている人は、「世界平和の祈りは唯一最高の祈りではない」という会を作って大いに主張なさったらよいのです。そのように誰でもが自由に主張できる環境を守らなくてはなりません。

この掲示板の過去ログを読んでいただければ分かるのですが、「世界人類が平和でありますように」という祈り言だけでなく、「世界中の人が平和で暮らせますように、守護天使様、神様どうぞ見守っていて下さい」というような祈り言も私は書いております。その祈り言は、「世界平和の祈り」と同じ意味で正しい祈り言ですから、そのような表現で祈

りたいならば、それはあなたのご自由です。

もっとも、「世界平和の祈り」は非常に高い波動の祈り言であるために、人によっては高すぎて祈りにくいということがあります。その場合には、その人の想念波動に合致した正しい祈り言から始めるのが、易しく神のみ心に入る良い方法であると思います。あなたにとって、「世界平和の祈り」よりも「世界中の人が平和で暮らせますように、守護天使様、神様どうぞ見守っていて下さい」という祈り言の方が自分の心境や感情にピッタリしっていて祈りやすいと思ったら、その祈り言で祈ったらよろしいのです。

但し、世界中の人々が別々の祈り言で祈っていたら、集団で声を合わせて祈ることはできません。個人個人が別々に働いては、地球を平和にする大きな働きはできません。地球人類が心をついに合わせなくては地球を平和にすることはできません。そこで、一つの共通した合言葉の祈り言が必要となってくるのです。祈り言のグローバル・スタンダードが必要なのです。その合言葉の祈り言として「世界人類が平和でありますように」がもっとも適当な祈り言であると私は教えているのです。「いや、それは違う。私は、世界平和の祈りよりも、こんな祈り言が世界の共通の祈り言として一番適当だと思う」という人がいたら、その人は自由にご自分の信じるその祈り言を提唱したらよいのです。

徹底的に議論をする重要性

いつも言うことですがけれど、日本では、相手に質問をすると、「私の言うことを信じないのか」と怒り出す人が少なからずいるようです。株主総会の進行妨害のための質問とは違って、相手の考えを知りたくて質問するわけですから、質問に対しては、大らかに何でも受け入れてあげるべきなのです。欧米の学校では、「質問は？」と教師が言うと、生徒はみんな手を上げますが、そのくらい違うんですね。五井先生も、いつも「質問ありませんか？」と講話の区切りにおっしゃっていたものです。

五井先生のみ教えの理解についても、その人その人の心境によって大きく異なっているものです。また、私が「世界平和の祈り」を話して理解して下さる人というのは、初めから理解できる素質を持っていたからに他なりません。理解してもらえない人には、何を言っても理解してもらえないものです。

また、どんなにお互いに話し合っても、お互いの意見が平行線のままで終わってしまうことがよくあります。その証拠に、テレビ朝日の「朝まで生テレビ」に出演した共産党の人が、自民党の人と一晩の議論の後に納得して自民党に移ったということは聞いたことがありません。しかし、だからといって議論が不要とは思いません。お互いに自分の意見を出し合い、相手の意見を聴くことは、大調和への第一歩であるのです。お互いに相手に賛成できなくとも、少なくとも相手の考えを知ったことは、何も知らないよりもずっと前進していることとなります。

黙っているのは、自分が何を考えているのか、相手に理解してもらえません。日本にしても、日本の政府がアメリカに何も言わないで黙っていたら、アメリカは日本の真意を理解できません。お互いに腹を割って自分の意見を出し合い、自分の意見が誤っていたら反省して訂正し、相手の意見が誤っていたら、穏やかに思いやりをもって正してあげることが必要です。それでも相手が反省しないようであれば、相手の天命の完うを守護霊さんに祈ることです。

ある方が「議論は平行線で終わった」と掲示板で書いてましたが、それも決して無駄な徒勞の議論ではありません。その人と私とが自分の解釈をお互いに話して、どこが同じで、どこが異なっているかをお互いに知り得たことは、お互いにとって大きな前進であると思います。何も議論をしないよりも、少なくとも相手の解釈のどこに自分の解釈と異なる点があるかは分かったのですから、有意義な議論でありました。

さて、「世界平和の祈り」の教義は、誰がどんなに批判しようとも、それで崩れるような、そんなちやちな理論ではありません。「世界平和の祈り」に反対できる人は一人もおりません。ということは、「世界平和の祈り」を祈っている私たちに反対できる人は一人もいない、ということになります。「世界平和の祈り」は、肉体人間の頭脳知恵で考え出したものではなく、計り知れない無限の叡智を持つ神が人類救済のためにお説きになったものであるのですから、勝てるはずがないのです。

五井先生は宇宙神のみ心に代わって、「世界平和の祈りは最善の祈り言であり、何も付け足す必要のない完全な祈り言である」とお説きになっています。常識で考えてみましても、世界平和実現ほど大きな目標は思いつきません。世界人類の平和を祈ることほど愛深い行為も考えつきません。まことに「世界平和の祈り」は完全な祈り言であるのです。これを裏返して言えば、「世界平和の祈り」以外の祈り言や方法には、大なり小なり何らかの欠陥が潜んでいるということです。

徹底的な議論の末に、五井先生のみ教えを理解できる人が一人でも多く現れることを私は期待しております。

有意義な議論とするために

【有意義な議論のためのルール】

1. 自分の立場を明らかにする。
2. 一つのテーマに焦点をしぼる。
3. 簡潔に分かりやすく書く。
4. 抽象的ではなく具体的に表現する。
5. 他の主張を批判する時にも品位を失わない。
6. 他の主張を否定したら、その代替案を提案する。

7. 相手の主張を理解するように努める。
8. 自分の主張を相手に理解してもらえるように努める。

3年半の掲示板(PEACE NIFON)での議論を通して、以上のルールがまとまりました。たとえお互いの意見が合致せずに、平行線のままで議論が終わったとしても、それは決して無駄ではありません。「相手が何を思っているのか」と、お互いに相手の考えを知っただけでも、その議論は有意義なものであったと思います。

【自分を批判してくれる人は最良の友人】

自分で自分の誤りは案外気がつかないものです。ニンニクを食べて臭い息を吐いていても、自分では気がつきません。親しい身近な人に「臭いわよ」と言われて、「アッ、そうだったか」と気づいて口の中を洗ったりします。そのように、自分を批判してくれる人は必要なのですし、自分にとってありがたい人なのです。自分を批判してくれる人こそ最良の友人なのです。

【宗教とは無批判の人間をつくることではない】

批判と悪口（誹謗中傷）は違います。正しき批判は神のみ心の現れであり、相手の業を浄め、相手の本心を開き、社会国家を正す力があります。それに対して悪口は、自己の欲求不満からくる業想念であり、自分を卑しめることになります。宗教とは無批判の人間をつくることではありません。宗教をやればやるほど善悪の判断がつくようになり、批判力が鋭くなってこなければなりません。宗教をやって無批判の人間になったとしたら、それは誤てる宗教です。

【批判は神のみ心、批判と悪口は違う】

鋭い批判力を持ちながら寛容力も併せ持ち、自己の心を乱さず、平静を保ち、いかなる権力にも屈せず、恐怖感にも臆することなく、勇気を出して言うべきことを言うことが、宗教者のあるべき姿です。正しい批判についても、それは悪口である、それは誹謗中傷であると断定している人がいますが、そう思うのは、その人が批判と悪口を区別できないからです。批判と悪口の区別は、心を澄ませば自ずと判ってくるものです。そして、批判をした後は相手の天命の完うを祈ってゆく必要があります。祈りに始まって祈りに終わる生活こそ宗教者の生き方であるのです。

常識を外れずに常識を超える生き方

先日知り合ったSさんというご婦人は、白光真宏会の十年以上の会員で、70歳過ぎのご婦人ですが、草月流の師範理事だけあって、とても上品で優雅な方です。山の中が好きで都会の嫌いなSさんは、草月流の先生がお亡くなりになったのを機に、友人の紹介で富士宮に引っ越して来て、その後やはり友人の紹介で白光を知って会員になられたそうです。

ただSさんは、今は五井先生の本だけを読み、五井先生のお話のテープだけをお聴きし、「世界平和の祈り」だけを毎日お祈りしているのだそうです。そして、白光の講師職員や会員の人たちとなぜ交際しないのか、その具体的な例をいくつか話して下さいました。

そのお話のひとつを紹介すると、富士聖地で知り合った会員のAさんは、茨城に住んでいて、富士聖地に来るたびにSさんのお宅に泊まるようになったのですが、Aさんは「お祈りが大事」と言って、一人暮らしで体の弱い老齢のSさんに食事の支度をさせて、自分は何も手伝わず、お祈りばかりしていたそうです。たまりかねたSさんが「民宿に泊まって下さい」と何度も頼んで、「ようやくこの家を出て行ってくれた」とSさんはおっしゃっていました。

「お祈りだけしていれば、あとは何もしなくてもいい」と、Aさんは思い込んでいたようです。こんな非常識は世間で通用するはずがありません。祈りの形式に把われた非常識の一例と言えます。人に迷惑をかけなければ、何をしようと、何もしなくても、構いませんが、他人の家であるSさんの家に泊まらせてもらって、それもSさんがどうしても泊まってくれと頼むならいいですが、半ば強引に泊まって、自分はお祈りだけをしているというのは、Sさんも言っていました、「普通の人以下の非常識な行為」です。宗教信仰をしている人だったら、普通の人以上に相手のことに気を使うべきなのに、自分のことしか考えないのでは、利己的な自我欲望むきだしの生き方であって、誤った信仰態度であるのです。

教祖である五井先生の人格は間違いなく立派です。五井先生の教義も正しく立派です。ですから、五井先生の教義を学んでいる職員や講師や会員も、五井先生の心境にまではいかなくとも、少なくとも普通の人よりも立派であろうと、白光真宏会に入会したばかりの人は思うわけです。しかし、しばらくするうちに、職員、講師、会員の実際行動を見るうちに、その教えと実際行為とのあまりの落差にがっかりさせられるのです。白光真宏会に限らず、どんな宗教団体でもこれが現実なのですから、皆さんは、相手がどんなに大きな宗教団体の職員や講師だからといって、あまり期待してはいけません。悟っていない普通の人だと思って接することです。そうすれば、深入りしすぎて相手に心を傷つけられることも防げます。そして、無理に誰とでも仲良くつきあう必要もありません。自分の好き嫌いをはっきり出して、嫌いな人は嫌いな人と正直に思って、直感的に好きになれない人からは最初から遠ざかることです。そうすれば、あとで嫌な想いをすることもありません。

私は唯一会を率いているわけですが、私を慕って唯一会に入ったら、多くの宗教団体の会員と同じように唯一会のメンバーもみんな非常識の人間ばかりだったと思われるのは困ります。ですから、私自身も常に常識的な言動をするように努めますが、私の弟子になって下さる皆さんも、くれぐれも非常識な言動や奇異な格好をしないように心がけて下さい。

この世の中の常識だけに固まって生きていては、新しい発見も進歩もありません。かといって常識を外れた言動をしては、多くの民衆の支持を得ることはできません。それでは、世界平和運動をしようにも、非常識な変人の集団と思われるて行き詰まってしまいます。そ

ここで、常識を外れずに常識を超えて生きるという超常識の生き方をする必要があるのです。

襖を開ける時には指をこうして襖にかけて、このように襖を静かに開ける、というような細かい礼儀作法は、私も詳しく知りませんし、そうした礼儀作法を皆さんに要求することもしません。そうした形式的なことではなくて、相手への思いやりを持てば、自ずと相手を傷つけない、相手に迷惑をかけない行動になってくると思うのです。小我の自分を中心に考えず、相手の立場になって、相手を喜ばすことを考えてみる。自分の言動によって相手が嫌がっていないか、相手の立場になって考えてみる。常識的にはこの場合、普通の人はどうのように行動するか、と考える。そうした視点が必要なのです。

もっとも、常識的に行動することはそう難しいことではないのですが、常識を超える宗教の言葉を聞いているうちに、その宗教の言葉に把われて、知らないうちに非常識な言動をしてしまう、ということが少なくありません。たとえば前述のSさんが、Aさんに「誰でも歳をとったら死ぬんだから、あとで問題が起きないように遺言書を書いておくといいわよ」とアドバイスしたら、Aさんは、「思ったことは現れるのが真理だから、そんな死ぬことなんか考えたら、『想念の法則』によって死んでしまうから、遺言書なんか考えたくもないわ」と言って怒り出したそうです。これなどは誤った宗教観に把われた典型的な例で、常識を外れて非常識な人間になってしまったわけです。「想念の法則」は別名「恐怖の法則」とも言われ、この法則に把われると、いても立ってもいられないほどの非常な恐怖感に襲われるようになってしまうのです。この「想念の法則」を超えるために宗教があることを忘れてはなりません。

いつも私が申しますように、日常生活を当たり前生きて日々反省し、「世界平和の祈り」を祈ってゆけば、何ら常識を外れずに常識を超えた超常識の生き方をする事ができるのです。もし私の弟子に非常識な人を見かけたら、遠慮なく私に知らせて下さい。私はその人に注意します。誤った行為に対しては、指摘して注意して直してあげることが、相手の業想念を浄め、相手を真実に愛することになるのです。業想念に妥協してはいけません。

皆さんは、常識を外れず、普通の人から見て、「ああ、あの人は魅力的な人だな。なんて明るくて爽やかで気持ちのいい人なんだろう。何か宗教をやっているのかしら？ ちょっと聞いてみたいな」と思われるような人になって下さい。常識を持ちながら、人々に好かれ、正しい信仰心を持っている、そんな人が多く現れるように、私は「世界平和の祈り」を祈りながら願っているのです。

社会生活と信仰を両立させる常識のある生き方

会社に勤めている人は、自分の信仰している宗教のことを会社内で話すことはタブーですし、公立学校の教師や大学教授も、学校や大学の授業で特定の宗教の宣伝めいた話をする事は禁じられております。また、会社の社長が非常に信仰心あつく、宗教に寛容な会

社であっても、ごく一部の会社は例外として、「南無阿弥陀仏」とか「世界人類が平和でありますように」と仕事中に唱えることは許可されません。

学生はこの世に必要な勉強を第一に優先すべきですし、サラリーマンは会社の仕事を第一に優先すべきことです。学生は勉強の余暇に宗教の本を読んだらいいのですし、サラリーマンは会社の仕事を終えた余暇にお祈りしたらよろしいのです。勉強や仕事をする時には勉強や仕事に全力を集中し、電車に乗っている時とかお煎餅をかじっているような暇な時に「世界平和の祈り」を心の中でしたらよいのです。

宗教者のように朝から晩までお堂にこもって「世界平和の祈り」を声に出して唱えることなどできませんし、無理にお祈りしようとする必要はありません。「世界平和の祈り」は、社会生活の中では、無理をしないで出来る時にお祈り下さい。心の中に信仰を持ちながら、社会との調和をはかり、常識的に生きることは、できないことではありません。常識的に考え、常識的に話し、常識的に行動してゆくことが大切です。常識を外れずに、しかも常識を超えて生きる方法は、「世界平和の祈り」の日常生活の中にあるのです。